

## 4次元空間と臨死体験

齋藤 忠資

臨死体験には、常識からは考えられない意識の変容状態による超感覚（ESP）が見られるが、その内4次元空間を想定すれば、科学的に解明出来るものがある。以下その点について考察してみよう。

### I 鳥瞰図

2次元空間から3次元空間は見えないが、3次元空間から2次元空間は見える。又2次元空間から3次元空間の音は聞こえないが、3次元空間から2次元空間の音は聞こえる。これとのアナロジーから考えて、3次元空間から4次元空間は見えないが、4次元空間から3次元空間は見える。又3次元空間から4次元空間の音は聞こえないが、4次元空間から3次元空間の音は聞こえる。

臨死体験（体外離脱）でも体験者は、3次元空間のものは見え音も聞こえたが、3次元空間の人からは体験者の姿は見え、臨死体験者が声をかけてもその声が3次元空間の人間には聞こえなかったと証言している。

以下考察する4次元空間を想定すれば可能になる「内部透視」と「未来予知」と「360度視野」のいずれのケースでも共通している点は4次元空間から3次元空間を必ず上から鳥瞰するように見る (bird's eye view) という点である。ところで、3次元空間の人は2次元空間を必ず上から鳥瞰するように見る。

これとのアナロジーから考えて、4次元空間の人は3次元空間をいずれの場合も上から俯瞰するように見ると推定出来る。このことが何故体外離脱の時に殆ど例外なしに浮上し上から俯瞰するように見る (bird's eye view) のかの理由である。

### II 内部透視

2次元空間の不透明な建物の内部を、建物にいる人は見る事が出来ないが、3次元空間の人は、上から不透明な建物の内部をその内部に侵入することなしに見ることが出来る。これとのアナロジーから考えて、4次元空間の人は、我々3次元空間の不透明な建物の内部をその内部に侵入することなしに見ることが出来る（カク、68-69）<sup>1)</sup>。K.Osisによると、体外離脱の内52%に物体の内部が見えたという例が見られたと報告している。（1979,51）

#### 臨死体験（体外離脱）からの例

「天井や正面の窓や本棚よりも高い所にいた。見下ろすと食堂にいる母の姿が見えた。姉も母と一緒にそこに立っていた、壁の向こうにいる二人の姿が見えた。ソファに横たわっている自分の体も見えた。“私は死んでしまった。”と思った。姉が居間に入ってきて、私の姿を見つめる。やがて姉は食堂に戻ると、棚からカメラを取り出す。その時母が仕事の手を止めて、顔を上げ、姉に目を向けた。二人は私の身体から壁一つ隔てた向こうにいたが、私は肉体の中にいなかったの、すべてを見ることが出来た。」（Morse1992,135）

「障害物の向こうが素通しで見える。大きな建物の内部が見えるように、天井や壁をプラスチックで作った模型のように、病院全体が見える。真ん中に廊下があって、両側に病室があって、ベッドに患者達が眠っているのが上から立体的に見える。」(1994,16)

「私は家の中のすべての部屋が見えた。家のトップも、家の周辺も家の下も見えた。」(Benedict1996,42)

「私は自分の肉体を抜け出して、病院の真上にいた。そこから自分の身体が横たわっているのを見た。」(Moody1978,52)

「車の床に顔を下に向けて横たわっていたが、上から様子が見えた。車の屋根越しに中が見えた。」

「壁の外にある台所の電話を透視出来た。」(二箇所共Morrissey23)

「外にいる人が見えるはずはなかったのですが、妻と長男と長女と先生が廊下の向こうに行くのがはっきり見えた。」(セイボム183)

「私たちは、カーテンで仕切られた小部屋の中にいたが、隣の小部屋には女性がいて、眠っているのを見る事が出来た。その時私は私の身体の真上にとどまっていた、他の所には行かなかった。」(Ring1985,43)

「病院のホールまで移動することなしに、自分の病室から壁越しに、病院のホールの片隅にいた母と祖父が抱き合っていて泣いているのを見た。」(立花1994,195-196;アイバーソン1993,120.123)

「体外離脱して私は屋根を越えて学校全体を見た。見る事が禁じられている所まで。後でこっそりとその場所を見たが、体外離脱中に見た通りであった。」(Green79)

「体外離脱中に壁の向こうで寝ている弟を、夜でも見る事が出来た。」(Green79)

体外離脱中に壁越しに病院の内部を透視したのみではなく、透聴した例もある。

「ナース・ステーションの看護婦達や廊下の先の待合室の人達の姿や声が、壁を突き抜けて見えたり聞こえたりした。すべて聞こえただけでなく、人々の考えていることも分かった。」(Atwater116)

「同じ階の患者達の声が聞こえ、姿も見えた。廊下を挟んで向かいの部屋に入っている患者が、私の病室の騒音のことで看護婦に苦情を言ってる。廊下の奥にある看護婦の詰め所のデスクに、一人の医師が近づいて行くのが見えた。私が子供の頃から世話になっている先生です。看護婦が事情を話すと、先生は“彼女の母親に私から電話をしよう”と言った。実際電話をしてくれたことが、後から分かった。」(Morse 1992,117)

「廊下で夫と彼の叔母が泣きながら話すのを聞く。“子供たちに何て言ったらいいんだろう”と夫が言う。叔母は壁際の椅子に前屈みになって座っていたが、“本当にいい母親だったわね”と答えた。二人の様子が見えたのは、私が肉体から抜け出していた証拠。二人は病院の外、廊下の奥にいたので、ベッドから見えるはずがない。」(Morse1992,118)

## II 未来のヴィジョンを予め見ること

アインシュタインの相対性理論では、時間と空間は分離出来ない連続体と考えられている。従って4次元時空連続体では、時間の空間化が生じる。この時空連続体では、過去・現在・未来と言う時間の区別は、人間の意識が作り出すものであって、過去・現在・未来の全事象は、人間が知覚する以前から予め存在しており、その中で人間と物体は世界線を占有することから、「ブロック宇宙」と呼ばれている。(de Broglie114;Barnett72) H.Weylの次の言葉は見事にこのブロック宇宙を表現している。「客観的世界は端的に在るので、それは起こるのではない。唯私の身体の生涯線に沿って上方に向かって徐々に移動する私の意識の凝視の前にだけ、この世界の一断面は空間的な、時間に関しては連続的に変ずる、過ぎ去り行く像として蘇る。」(127)これは例えてみれば、夜車を運転している時、ヘッドライトに照

らし出されて、道のサイドの木等の風景が次々に通り過ぎて行くように運転している人には見えるようなものである。実際には道のサイドの木等の風景は、静止状態で予め存在している。ブロック宇宙では、過去も現在も未来も全事象は、人間が知覚する以前から予め存在している。唯人間の知覚が、ブロック宇宙の内の現在という一断面しか捉えることが出来ないだけに過ぎない。（これは脳フィルター説と関係する。）従って4次元空間に移行すれば、4次元時空連続体の未来も現在も過去も同時に一望出来ることになる。この点を例えを用いて説明してみると、夜飛び立とうとスタートした飛行機の窓から外の飛行場の照明灯を見ると、次々と照明灯が見えては過ぎ去って行くように見える。しかし上空から照明灯は同時に一望でき、実際には静止状態で予め存在していたことが分かる。

F.G.Greenは、時間を空間化して、線が平面を移動するとして、通り過ぎたところを過去、これから通る所を未来、現時点の位置を現在とすると、上から見れば過去と現在と未来は同時に一望できる、つまり4次元空間では、我々の3次元空間のような過去・現在・未来という時間の区分はなくなるという。(1981,121-124) 音楽の例えを用いて説明すると、音楽は時間の芸術で、実際には曲は現在しか聴けない。しかし楽譜（2次元）では時間は空間化され、上から（3次元）は、過去・現在・未来は時間の区別なしに同時に一望出来る。未来もすでに定まっている。（これはブロック宇宙と同じである。）また時間の制約から解決されて、どの時間にも上から介入出来る。別の例えで説明してみよう。例えば初めての道を車で運転しているとすると、角を曲がったらどうなるかは分からない。しかし上から見れば、これからどうなるかも、すでに走ってきた道も同時に一望できる。

従って4次元空間では、我々の4次元時空連続体のような過去・現在・未来と言う区別はなく、すべては同時に一望でき、時間の制約から完全に解決されている。L.LeShan が超自然界の特徴として指摘している点は、そのまま4次元空間に妥当する。L.LeShanによれば、超自然界には過去・現在・未来といった時間の区別はなく、シークエンスとなっている行為がすべて同時に生じているのである（永遠の現在）。(86-88)

以上の点から考えて、臨死体験時に4次元空間に移行したとすれば、自分の生涯全体を未来も過去も現時点で見るという現象が生じることになろう。(Greene&Krippner71-72)

J.Slawinskiは、臨死体験の時には人間の電磁意識が時間と空間の制約のない4次元連続体の中に移行していると推定している。事実ある臨死体験者は「まるで雲の上に座って、自分の人生の過去・現在・未来のシーン全体を見下ろしているかの様だった。」と証言している。(Noyes & Kletti1977,188) このことは自分の生涯全体を外から同時に一望している人は4次元空間から、つまり上から全生涯を俯瞰していることになる。これが既に述べたように体外離脱が殆ど例外なしにbird's eye viewになる理由の一つである。

### 臨死体験における未来の記憶

我々には過去の事象は記憶できるが、未来の事象は記憶できない。しかし臨死体験の時に見た未来のヴィジョンが、その後そのヴィジョン通りに細部まで正確に実現したという例が見られる。これは通常は起こり得ない事象が生じたということの意味している。この種の研究のためには、まず未来の記憶が細部まで正確で真正のものであるかを確認する必要がある。そのための基準として、G.W.Lambertがあげている予知夢に関する基準の内、本質的に有効なものは次の諸点である。

- ①未来の記憶が現実として実現する以前に、信頼出来る証人に報告されていなくてはならない。
- ②未来の記憶は、それを見た時点では起こり得ないと思われるような事象でなければならない。
- ③未来の記憶は、その後現実となった未来の出来事をそのままの形で表したものでなければ

ならず、単なる象徴的前兆に過ぎないものであってはならない。

④未来の記憶の細部は、その後現実となった未来の出来事の細部を正確に一致していなければならない。(5-10)

①に関しては、事柄の性格上、本人以外の証言をとることが難しいケースが多いけれども、そのデータが信頼出来ると判断される場合は採用しても良いであろう。

臨死体験の時に見る未来のヴィジョンは、K.Ringが指摘しているように、本人の個人的な人生に関するものと、地球の将来に関するものとに二分できる。(1982,47以下;1984,195)

2) 臨死体験者本人の個人的な人生の未来のヴィジョンは、臨死体験中に生じる人生回顧(life review)のに対して(Ring1985,183;Fenwick,P.&Fenwick,E.173) 地球の将来のヴィジョンは、人生回顧とは関係なしに生じる<sup>3)</sup>。F.G.GreenとS.Kripnerが提唱しているように、フラッシュ・フォワードを考慮すれば、パノラマ的人生回想体験は、「生涯俯瞰体験」と呼ぶのが正しいであろう(64)。

それでは未来の記憶というのは、一体どのような性格を持つものなのか？未来の記憶を実際に体験したP.M.H.Atwaterは未来の記憶を次のように定義している。「客観的な現実としてある出来事を経験する前に、これと同じ出来事を主観的現実として生きること。・・・未来記憶は極めて豊かな感覚を伴っており、記憶内容は詳細で、動作や思考、匂い、味、決断、風景、音等が実際の事象として記憶されている。これらは皆実際に体験されており、物理的、感情的、感覚的に経験されている。・・・実際に体験される内容なので、日常の現実と区別するのは難しい。」(1996,20)「未来を前もって生きる体験は、現在の現実において普通に生活しているのと同じ位詳細な感覚上の手応えと実際の動きが伴う。このことは記憶に残るが、後になってその記憶は再浮上する。それはあるシーン、音、感覚、匂い等によって引き起こされる。今正に経験していることを、すでに記憶していることは明白になる。」(1996,70)

「まだ起こっていなかったことについてのシナリオが急に実現する。そのシナリオには、思考、会話、動き、感触、行われた事すべてが詳細に複雑に反映されており、そこに関わる人々、場所、活動、出来事もすべて実際に起こったことと同じである。」(1996,24)

「未来の記憶は、そのまま薄れてしまうが、実際に未来のその瞬間が近づいたり、記憶を呼び覚ます引き金となる出来事が起きた時だけ思い出す。未来の記憶は実際に実体や行動を伴い、分刻みの詳細な展開が存在する。そしてこの展開は後に寸分違わず正確なことが証明される。」(1994,134) 本人の個人的な将来起ころうとしている人生の出来事を、現在前もって生きる体験をするということは、未来の出来事のリハーサルを現在行うことと解することもできよう。

従って未来の記憶は、唯見るだけの透視や、聞くだけの透聴や、言い当てるだけの予言や、知るだけの予知とは異なる。未来の記憶では本人が未来の出来事を前もって経験することであって、未来の出来事に関する情報だけを予めキャッチするということではない。デジャ・ヴュ(既視感)は、記憶の基本的な骨組みがある条件下で映像化したもので、過去の体験と同一化を辛うじて可能にする程度の情報しか提供されていないという説や、共通要素を持つ様々な記憶群が多くホログラフィーの様になって、まだ見てもいないことを既に見たことのある事柄でもあるかの様に錯覚してしまうという説があるが(Atwater1996,75)、いずれにしても未来の記憶と違って、完全に細部まで一致しているものではなく、実際の生活感覚をすべて伴うような豊かな経験と言ったものではない。

### 未来の記憶の例

①彗星探索家木内鶴彦は1976年22才の時、上間膜動脈十二指腸閉塞という奇病にかかって臨死体験をした。その時ある奇妙な記憶が脳に鮮明に残った。「それは30畳位の大変風格のある広い部屋で、多くの人々が話をしている人の方に注目して聞き入っているシー

ンで、奥には由緒ありげな広い床の間があり、その床の間には幅1m位、高さ1m50cm位の大きな絵が一枚吊り下げられていた。その絵には簡単な幾何学模様が描かれていて、緑色が多くその中に朱色で直線が引かれている。それは建物の見取り図の様だ。そして約30人の人が壁や襖を背に、丁度コの字形に座り話を聞いている。話し手は灰色っぽいシャツを着、床の間を背にしてその中央で正座して話をしている。その人は何と中年位になっている自分ではないか。話を聞いている人達は、現在の私(22才)と同じ位の年の人達が殆どであった。私は星の話をしていて。私は話し手の後ろから少々見下ろす形でこの様子を見ていた(44~45)。それから18年後、40才になった木内さんは1994年10月に「将来世代に対して、我々は今何をして何を残すのか」というテーマで講演をするために、高野山清浄心院(和歌山県)に生まれて初めて行った。「そこには広い部屋と部屋の奥には広い床の間があり、その壁には臨死体験の時見たのと同じ掛け軸が掛かっていた。木内さんは鳥肌が立つのを覚えながらよく見直したが、間違いなくあの時見た掛け軸だった。やがて参加者が部屋に集合し、壁を背にしてコの字型に座った。臨死体験の時自分の着ていたシャツの色は灰色だったが、今日は緑色のシャツを着ていた。ところが蛍光灯の影響で実際は灰色に見えた。18年前の臨死体験中に見た自分のシーンがそこにすべてあった！」(77-78)

②「Belleというアメリカの女性は、1971年に手術中に心不全と肺虚脱を起こし、臨床的には長時間死亡状態にあった。その時霊的なガイドが彼女の人生を回顧させ、彼女の未来について教えてくれた。Raymond Moodyという名前をfull nameで教えられ、彼の写真を見せられ、その時が来たら、ムーディに彼女の臨死体験について話すように告げられた。彼女が臨死体験をしてから約18ヶ月後に、ムーディが彼女の住む南部の小さな町に引っ越しして来た。Belleの臨死体験の4年後の1975年のハロウィーンの前夜(「Life after life」)という臨死体験の本をムーディが出版する数ヶ月前)、ムーディの妻ルイズが息子を「お菓子をくれないと悪戯をするぞ」(trick-a-treating)に連れていった。R.ムーディは、知らない家には息子を連れて行くなと妻に言った。Belleは気分がすぐれないから、私を呼び出さないように夫に頼んだ。ムーディの妻は夫の言うことは聞かず、Belleの夫も妻のいう事を聞かなかつた。夫が呼びに来たのでBelleは玄関に出て、その子の名を尋ねると、その子は自分の名をfull nameで言う習慣はないにもかかわらず、この時初めて「僕はRaymond Avery Moody 3世です」と答えた。Belleは“御主人と是非お話がしたい。”とルイズに頼んだ。こうしてBelleはR.ムーディと自分の臨死体験について話すことが出来た。このBelleの話は、ムーディの妻によってもその通りである事が確認されている。」(Moody28-29; Ring1984,190-191)

③「アメリカ中西部にある女性が、1959年出産時頸部が裂けて臨死体験をした。その時様々な存在から私の未来の出来事を告げられる。(私には選択の自由はあるようだ。)私は引っ越しすることを期待していた町とは別の場所において、3人の子供が成長していた。私の夫と私は中年になっていた。私は台所でサラダを混ぜ合わせ、縞のある薄い織物を着ていた。私の髪には白髪が混じっていた。私の腰はかなり太っていたが、年を取った女性にしてはまだ良いスタイルであった。人間関係や出産については安心していた。私は楽しい気分夕食の用意をしながら、年上の娘と笑っていた。新たに産まれた若い娘は、他の子供達とどこかに行っていた。この娘もまた成長していた。1959年の写真には写っていない何人かの小さな子供達も含まれていた。私の夫は丁度シャワーから出て来てローブ(裾まで垂れる長いゆるやかな部屋着)を着ながら廊下を歩いていた。夫は私よりも体重が増加し、夫の髪は完全に白髪であった。息子は芝生を刈っていた。二人の子供は、我々と一緒に暮らしてはいないで、訪ねてくるだけ。このシーンの間だけは、五感について例外が生じた。私が、私たちの家族が将来なるであろう事柄を知った時、私は見る事、聞く事、匂いのかぐことが出来た。

特に際立つのは、家の周りに生えている常緑樹の匂いと、刈ったばかりの草の匂いとが混

じった、私が作っているキュウリのサラダの匂いである。私のオーデコロンとシャワーから出たばかりの夫の石鹸の匂いも分かった。このシーンの記憶は決して忘れる事が出来ない程の強烈な印象を私に残した。

#### 1981年の現在の状況との比較

- 1) 1981年の現在, 1959年の臨死体験の時見たあのシーンと全く同じものを見ている。
- 2) 子供達も又あのシーンと同じである。
- 3) 我々家族は, 一緒になると大変楽しく過ごし, 話し合い笑い合うという点は, あの時のシーンと同じように現在なっている。
- 4) 年上の娘は結婚し二人の娘を持ったが離婚した。この娘が新しい生活を始める間, 私は2年間子守として二人の小さな女の子を育てるのを手伝った。二人の女の子は我々の家族の一員となっている点でも, 例のシーンと現在の状況は一致している。
- 5) 我々が現在住んでいる家も又, 例のシーンと一致している」(Ring184-185)。

未来のヴィジョンが正しければ決定論となるが, 人間の選択の自由にあるとこの女性は考えている点に注目したい。

④「アメリカのある男性は, 10才の時虫垂炎から穿孔を起こしたため手術中臨死体験をした。回復後, 臨死体験中の奇妙な記憶が残っているのに気付いた。それは5つの本人の個人的な人生の将来に関するものであった。臨死体験をした1941年から1968年までその事を全く信じていなかった。ここでは, 既の実現した最初の二つの出来事のみを取り上げ, 他の三つは時間的にみてまだ将来のことなので対象外とする。

1) 28才で結婚するという内容。28才の誕生日には, 結婚相手とまだ会ってもいなかったが, その通りになった。

2) 子供は二人出来て, 現在見ている家に住む。本人は椅子に腰掛けていて, すぐ前の床の上で子供が二人遊んでいる場面が鮮明に記憶に残っている。誰か記憶の中でははっきりしないが, 妻が結婚していることは分かっていた。未婚の10才の男の子に結婚生活の実感など分かるはずもないのに, 感じるはずのないおかしな実感をとてハッキリと覚えていた。25年以上も記憶として残っていた。その時私は自分の未来を見ていたのではなく, 未来を実感していた。この時未来の出来事は, 現在となっていた。妻が部屋の左側に座っているのは分かっていた。床で遊んでいる子供は, 3才と4才位。上の子は髪色の黒い女の子。下の子は金髪の女の子。養女であることが後から判明した。当時私は下の子を男の子だと思っていたが, 実際には二人共女の子であることが判明した。

壁の向こうに何だか分からないとても変わったものがあるのが分かった。1968年のある日, 椅子に座って本を読んでいて, 子供の方へ目をやった時, 1941年のあの記憶が現実のものになっているのに気付いた。壁の向こうにある奇妙なものは, 強制通風式の暖房装置であった。この装置は1941年当時は使用されていなかったために, それが何か分からなかったことが判明した。」(Ring1984,185-187;1982,50-52)

この例に対しては, 下の女の子を当時は男の子と思い誤っていた点や, 一般的イメージとが偶々一致しただけという可能性が弱点として挙げられるが, 暖房装置の件は単なる偶然として解することは難しい。

⑤「アメリカのある女性は臨死体験中に, 自分の未来のヴィジョンを見たという。そのヴィジョンの中で, 背の高い金髪の男性が, 二人の子供と歩いているのが見えた。小さな女の子が飛んだり跳ねたりする毎に, 巻き毛が揺れている。もう一人は男の子だった。本人には, これが将来の家族だということが分かった。その時はまだ会っていないというのに, 夫や子供を愛おしく思った。その後この女性は, 金髪の元バスケットボールの選手と結婚し, 男の子と女の子二人の子供をもうけた。」(Morse1990,123)

この例は一般的なイメージなので, 偶然一致した確率はかなりあると思われる<sup>4)</sup>。

臨死体験時以外の未来ヴィジョンの例もあるので、次にその事例を見てみよう。

⑥「30才代半ばの女性が、電気痙攣治療セラピー(ECT)を受けた時、渦巻き状のトンネルを光の点へと向かい、光の存在と出会った。自分と光の存在の間にシネマ・スクリーンの様に、彼女は自分の人生回顧を見た。そのシーンはカラー付きで動きがあり、立体で、子供時代から始まり、5才の誕生日を細部まで完全に再現していた。自分もそのシーンの中にいた。過去に経験した記憶もその中にあった。それはカクテルパーティのシーンで、広々とした見知らぬ家のエレガントなリビングルームに、付き添われ、客の小さなグループに紹介され、黒の縞子のドレスを着た、洗練された、片手にはシガレット、もう一方の手にハイボールのグラスを持った女性に歓迎された。彼女の隣には、千鳥格子のスポーツジャケットを着、マルティーニをチビチビ飲んでいる一人の男性がいた。サークルの他の人についても詳細に描かれた。会話の一字一句までも再現できた。暖炉の火が燃えていた。シーン全体は鮮明な色と、四方からの音と立方体(固体性)から構成され、完全にリアルであった。それから2年後に、この女性はあるカクテルパーティに招待され、2年前に見たカクテルパーティのシーンと細部まで完全に同じであるのに気付いた。唯一つ違っている点は、すべてが写真のネガの様に逆であった。」(Floyd1996,190-193)

⑦Kathleen J.Fortiは、18才の時レイプされた時、体外離脱し、その時自分の未来の人生の一部を細かく体験した。少し年をとった彼女は揺り椅子に腰を下ろし、足元に集まった子供達に物語を聞かせている。椅子は美しい彫刻模様のある、黒い漆塗りの東洋風アンティーク、壁に掛けられている絵、彼女が住んでいる家の細部まで一つ一つはっきりと正確に分かった。自分が考えている事、動作、匂いや味、会話、感情、日常生活の感覚までもはっきりと分かった。その後この自分の未来のヴィジョンの事を忘れてしまったが、それから5年後、彼女は結婚し、夫が所有していた家に住むことになった。その家は美しい彫刻模様のある、黒漆で仕上げられたアンティークの東洋風揺り椅子や、絵画、壁紙その他細部に至るまで、すべてが体外離脱の時に見たものと全く同じであった。それまで未来のヴィジョンは幻覚だと思っていたが、それは本当の自分の未来の一部であることが分かった。6年後の離婚という出来事は、この未来のヴィジョンの中には含まれていなかった。未来のヴィジョンの中では、彼女は夫の家で揺り椅子のそばに子供達を集めて、子供達に物語りを聞かせているが、離婚したので、別の状況下で現在子供達に物語を話すという仕事に携わっている。彼女は数多くある未来の可能性から、我々は選択することが出来、自分は自由意志で離婚することを選んだという。」(Atwater1996,19-20) 離婚によって生じた未来のヴィジョンの内容と、現実との食い違いは、この例の信憑性にとって欠点と思われるが、未来の記憶が正しいとすると決定論となり、人間の自由意志が問題になる際に重要なヒントになる。

未来の自分の姿を予め現在見てしまうという常識ではあり得ない現象の本質を考える上で、看視されてはならないのは、すでに述べたように、それが人生回顧とセットになっており、臨死体験者の生涯全体が未来も過去も含めて、一度にヴィジョンの形で現時点で示されるという点である(Morrissey1997,29-30;Ring1998,176)。臨死体験中の生涯俯瞰体験の特徴は、自分の生涯全体が過去から未来の順序か、あるいは逆の順序で各シーンが一瞬の内にヴィジョンの形で示されるといえる点である(Greene&Krippner 63-64;Blackmore184-185;Moody1975,64-65)。過去も現在も未来も、ここでこの瞬間に示されるということは永遠の現在ということであり、不可分の全一性ということである。実際臨死体験の人生回顧の特徴の一つは、その時は相手の立場になって追体験出来たし、通常的生活ではわからないこともすべて分かったという点にある(Atwater1994,59;イーディー116-117)。過去・現在・未来という時間の区別はなく、時間の制約から完全に解放されたという点は、生涯俯瞰体験以外でも、臨死体験の状態の特徴の一つとなっている(Martin16;Top&Top131-134;Wintek48)。臨死体験の時には、時間の制約から解放され、未来と過去に自由にアクセス出来たと報告されている(Brown202)。

## IV 全方位（360度）視野

2次元空間の物体を3次元空間からは、上から360度のすべての角度から同時に見る事が出来る。同様に4次元空間では3次元空間の立方体を上から、視点を変えることなしに、360度のあらゆる角度から1度に見ることが出来る(Pickover51; カク97)。4次元空間からは、金庫は上下のない箱のように見える。2次元の紙に描かれた正方形のすべての辺を同時に見ることが出来る様に、4次元空間から3次元空間の立方体のすべてのの側面を同時に見る事が出来る(Pickver30)。これを脳が3次元空間用に切り換えると球状視界となる(Greene,F.G.,Out1983,174-175.177)。

2次元空間（紙）上の異なるA・Bという二つの点も、3次元空間を利用して紙を折り曲げてA・B2点を重ね合わせるか（共存）、A・B2点間を連結しているワームホール（3次元空間）を超高速で移動すれば非局所性の問題は、J.ベルの不等式によって提案され、アスペ等の実験によって実証された(Nadeau&Kafatos185-100)。この実験によって空間の制約から完全に解放されている、どこでもという遍在性の次元が、我々の日常世界の背後に隠された仕方で存在していることが実証された。超自然界の非局所性について、L.Leshanは次のように述べている。「2つの事物の分離性と個別性は、両者の統一と関連性に対して二次的なので、空間は2つの事物間のエネルギーないし情報の交換を妨げる事は出来ない。(87)」4次元空間は非局所性の世界であり、視点も空間の制約から解放され遍在性を持つ。従って360度の全方位から同時に見ることが可能となる。360度ということは視野の完全な全体性を意味している。

### 臨死体験における360度視野の例

臨死体験（体外離脱）の特徴の一つは、360度のすべての角度から立方体が視野を変えることなしに、同時に見えるという点にある。K.Osis によると体外離脱の例の内40%に、360度視野か、あるいは角を曲がった先を見るという例が見られるという。(1979,51)

「私は生まれて初めて自分の姿を3次元で見ていた。鏡に映った自分の姿は平面でしかない。霊の目はもっと多くの次元でものを見ることが出来る。自分の身体があらゆる方面から、しかも一度に見えてしまう。前から、後ろから、横から、思いのままに。」(イーディ53)

「私は頭を動かさずに、私の周りのすべての物を見ることが出来た。まるで360度の周囲のすべてを1度に見ることが出来るかのようであった。」(Wintek47-48)

「体外離脱中に360度の視野を持った。」(Lundahl&Widdison118)

「光の世界では、天使を360度の角度で見ることが出来た。前方・後方・上から・下から・両サイドから等」(Morrissey28)

「体外離脱中は同時にすべての方向を見る事が出来た。どこでも至る所を見る事が出来た。」(Lundahl&Widdison116)

「体外離脱中振り返る事なしに、360度の私の周囲のすべての物を地平線まで知覚できた。すべての物を同時に一望できた。例えば部屋全体の天井と壁を一度に見る事が出来た。」(Green78)

「エーテル麻酔で体外離脱して、自分の肉体を下に見、同時に照明灯のてっぺんの埃を見た。体を動かすことなしに360度見ることが出来た。」(Atwater1999,65)

「第二次大戦中ある兵士は、ドイツ軍の機関銃に狙われながら逃走中、360度の視界を体験した。前方を見て逃走していたのに、敵兵が後方から自分を狙っているのが見えた。」(Moody1988,129)



「体外離脱中は360度の視野と通常の視野の両方を持った。」(Harary265)

次に臨死体験(体外離脱)中の球状視界の例を挙げる。

「私はすべてが見えた。何でも！天井の照明のてっぺんも、ストレッチャーの下も、天井のタイルも床のタイルもすべて見えた。同時に！360度の球状のヴィジョン。しかも球状ではなく、細部まで見えた。ストレッチャーのそばに立っている看護婦の頭の毛1本1本がすべて。その毛穴も見えた。何本の毛を見たかも正確に分かった。」(Ring1998,63)

「私は私の前方や周辺のみでなく、私の背後と私の上方と私の下を見ることが出来た。それは完全な球状であった。私ははるか彼方まで見ることが出来た。」(Cox-Chapman,128)

「まるで自分の目が巨大な球になって、すべての物を見ているか、あるいはまるですべての方向が同時に見える視点に自分の目があるように思われた。」(Noyes&Kletti1976,106)

J.Mitchellも体外離脱では球状体レンズを通して見る視野がしばしば報告されていると述べている(158)。

臨死体験以外でも360度視界の例は報告されている。「瞑想中は肉体から解放され、透過性の光の流れとなって、全身の気孔から外に流れ出した。肉体という殻に限定されていた感覚が拡大され、周囲の原子すべて自分の体として感じる。今や広大な全方位的視野に変わって、上下左右前後の一切の物が同時に知覚された。」(ヨガナンダ、パラマハンザ149)

深い瞑想状態の一つの間、とても深くて驚く体験をした。私の両目は閉じているが、突然すべての物を見ることが出来た一部屋全体の中の自分を。どこから私は見ていたのかは分からない。私の両目から、あるいはある一つの視点から私は見ていなかった。至る所から私はすべての物を見ていた様だ。私の体のすべての細胞と私の周りのすべての粒子の中に両目があったようだ。私は同時に前方から、上から、下から、背後から等々見ることが出来た・・・見られた物から離れた観察者はいないようだった。awarenessのみがあった。(Lieberman47)

「クンダリーニの修行中白光が頭頂から抜け出ると、私の後ろには、私の異常に気が付いて、じっと注視しているボーイがいるとか、裏の坂道をコカコーラのトラックが登っていた等、ありありと見えてしまうのです。そして天井のダクトから吹き出す空調の気流が部屋の中をどう流れるか等も見えてしまう。」これらの事は後で事実であることが確認されたという。(天外伺郎 43)

体外離脱中に270度の視野を持ったという例も報告されている。「突然私は空中に浮かんで、泳いでいる自分の姿を見下ろした。まるでこの頭に二組の目が別々に繋がっているみたいであった。私は泳いでいる自分の3フィート程上において、少し遅れてついていった。空中にいる私には目指す海岸線を前方に眺めることが出来た。同時に泳いでいる私には水中の様子が見えている。知覚の歪み等はすべてなく、270度位の範囲を一度に見渡すことが出来た。」(Morse1992,162)

4次元空間からは、3次元空間の立方体を360度の全方位から見る事が可能であるが、F.G.Greeceによると、これを3次元空間に脳が切り換えると、視点が天井のコーナーとか上空が一番適しているという(Multiple1983,56-57)。言い換えれば、これは体外離脱の時に、何故殆ど例外なしに上から下を見下ろすような俯瞰的視点になるかの理由になる(bird's eye view)。事実体外離脱の例では、殆ど決まって天井のコーナーか、あるいは上の方から下を見下ろすという視点になっている。

## V 結論

以上の考察によって、以下の諸点が明らかになった。

① 4次元空間を想定すれば、臨死体験の事例に見られる通常の知覚を超えた現象が説明が可

能となる。つまり何故 bird's eye view となるのか、又何故通常は不可視の3次元の立方体の内部が透視出来るのか、さらに何故体験者本人の未来の姿を現時点で予め見ることが出来るのか、あるいは何故360度という全方位視野が可能なのかという諸点が説明できる。

②臨死体験によって開かれる4次元空間の世界では、我々の世界の時間と空間の制約から解放されている。従って通常の過去・現在・未来という時間の区別はないので、未来の事象が現在予め見ることが可能となるものと思われる。空間の制約から解放された世界は、非局所的な、すべての事象が完全に一体になっている分割不可の全一性の世界なので、360度という全方位の視野が可能となるものと考えられる。我々の世界の時間と空間の制約から解放された世界では、未来・現在・過去のすべてのものが、あらゆる所に（偏在性）同時に現在存在している（永遠の現在）という世界である。

③体験者本人が自分の未来の姿を、現在予め見るという体験は、通常の知覚では不可能な現象であり、幻覚以外には説明できない。従って未来の記憶が幻覚でなければ、未来の記憶という現象の客観的リアリティを示すものと言えよう。

## 註

①もっともカクは患者の皮膚を切らずに体内手術が可能であり、金庫を開かずに中の金を取り出す事が可としているが、臨死体験（体外離脱）の場合には、我々の物質界の物体とタッチ不可なので、上記のことは不可である。

②この説の弱点は、他人の個人的未来のヴィジョンを含んでいないという点にあるが、本論ではこの種のヴィジョンは対象外とする。

③もっとも本人の個人的な将来のヴィジョンが、人生回顧とは関係なしに、超自然的世界にいる間に、死んだ身内や友人か、あるいは霊的なガイドによって授けられるケースもあるが、この場合でも地球のヴィジョンは含まれていない。

④リサ・ウオーカーは、1979年臨死体験中、光の中で自分の全人生が凝縮された形で見え、自分の未来を一瞬ちらっと見たと証言しているが、詳細は不明である。

## 引用文献

Atwater,P.M.H.(1994) Beyond the Light, A Birch Lane Press Book.

Atwater,P.M.H.(1996)Future Memory, A Birch Lane Press Book

Atwater,P.M.H.(1999) Children of the New-Millennium, Three Rivers Press

Barnett,L.(1966) The Universe and Dr.Einstein, William Marrow and Company.

Benedict,Mellen-Thomas(1996) Through the light and beyond, in L.W.Bailey & J. Yates, The Near-Death Experience, Routledge.

Blackmore, S.(1993) Dying to Live, Grafton

Brown, J.H.(1997) Heavenly Answers for Earthly Challenges, Pasadena CA:Jemstar

Cox-Chapman,M.(1995) The Case for Heaven, G.P.Putnam's Sons.

イーディ,B.(1995) 死んで私が体験したこと, 同朋舎

de Broglie,L.(1959) in P.A. Shilpp(ed.)Albert Einstein:Philosopher-Scientist, Harper& Bros

Fenwick,P.&Fenwick,E.(1996)The Truth in the Light,.Headline

Floyd,K.(1996)ECT:TNTorTLC? Journal of Near Death Studies,vol.14.

Green,C.(1968) Out-of-the-Body-Experiences, Institute of Psychophysical Research

Greene,F.G.(1981) A Glimpse behind the life review, The Academy of Religion and Psychical Research,vol.4.

- Greene,F.G.(1983) The Out-of-Body Experience, Extrasomatic or Intrasonic Phenomenon? The Journal of Religion and Psychical Research,vol.6.
- Greene,F.G. (1983)Multiple Mind / Body Perspectives and the Out-of-Body Experience , Anabiosis, vol.3.
- Greene,F.G.&Krippner,S.(1990) Panoramic Vision, in G.Doore(ed.) What Survives? J.P.Tarcher.
- Harary,S.B.(1978) A Personal Perspective on Out-of-Body-Experiences, in D.S.Rogo (ed.) Mind beyond the Body, Penguin Books.
- アイバーソン,J.(1993) 死後の生, NHK出版。
- カク,M.(1994) 超空間, 翔泳社。
- 木内鶴彦,(1995) 宇宙の記憶, 龍鳳書店
- Lambert,G.W.(1965) A precognitive dream about a waterspout, Journal of the Society for Psychical Research, vol.43.
- LeShan,L.(1974) The Medium, the Mystic ,and the Physicist, The Viking Press.
- Liberman, J.(1995) Take off Your Glasses and See, New York: Crown.
- Lundahl,C.R.(1993) Otherworld personal future revelations in a near-death experiences , Journal of Near Death Studies, vol.11.
- Lundahl,C.R.& Widdison,H.A.(1997) The Eternal Journey,Warner Books.
- Mattin,L.(1996) Searching for Home, Cosmic Concepts.
- Mitchell,J.(1978) Out-of-the-Body Vision, in S.Rogo(ed.) Mind beyond the Body, Penguin Books.
- Moody,R.A.(1975) Life after Life, Bantam.
- Moody,R.A.(1978) Reflections on Life after Life, Bantam Books.
- Moody,R.A.(1988) The Light Beyond, Bantam Book.
- Morrissey,D.(1997) You Can See the Light, Stillpoint Publishing.
- Morse,M.(1990) Closer to the Light,Villard Books.
- Morse,M.(1992) Transformed by the Light, Villard Books.
- Nadeau, R.& Kafatos, M.(1999) The Non-Local Universe, Oxford University Press.
- Noyes,R.& Kletti,R.(1976) Depersonalization in the Face of Life Threatening Danger: An Interpretation, Omega, vol.7.
- Noyes,R.& Kletti, R.(1977) Panoramic Memory Omega, vol.8.
- Osis, K.(1979) Insiders' views of the OBE , in W.G. Roll (ed.) Research in Parapsychology 1978, The Scarecrow Press.
- Pickover, Cl.A.(1999) Surfing through Hyperspace, Oxford University Press.
- Ring, K.(1982) Precognitive and prophetic visions in near death experiences, Anabiosis, vol.2.
- Ring, K.(1984) Headline toward Omega , Quill .
- Ring, K.(1992) The Omega Project, William Morrow and Company.
- Ring, K.(1998) Lessons from the Light, Plenum Press.
- セイボム,M.(1986) 「あの世」からの帰還, 日本教文社
- Slawinski,J.(1987) Electromagnetic radiation and the afterlife, Journal of Near-Death Studies, vol.6.
- 立花隆(1994) 臨死体験上, 文芸春秋。
- 天外伺郎(1996) 理想的な死に方, 徳間書店
- Top,B.L.&Top,W.C.(1993) Beyond Death's Door, Salt Lake City, UT:Bookcraft
- Wintek, J.C., A Precious Encounter on the Other Site, Dogwood River Publishing.

ワイル.H.(1959) 数学と自然科学の哲学, 岩波。  
ヨガナンダ,パラマハンサ (1983) あるヨギの自叙伝, 森北出版。